1Fa-5

知的障害児の食物選択行動とその影響要因の検討

伊藤圭子　（広島大）

目的　知的障害児の偏食傾向や食行動の偏りについての問題が指摘され、生活習慣病への移行が危惧されている。多様な食物の中から自分に必要な食物は何かを考えて選びとれる栄養学習が必要である。そこで今回は、知的障害児を対象とした栄養教育実践への示唆を得るため、知的障害児の食物選択行動の実態とその行動にどのような要因が影響を及ぼしているかを検討することを目的とする。

方法　対象は、広島県内の小・中学校の障害児学級児童・生徒（51 名）とその保護者である。児童・生徒に対しては、インタビュー法によって料理メニュー表から１食分の献立を選出させ、その選出理由を問うた。保護者に対しては、児童・生徒の食物摂取頻度や嗜好と保護者の食生活意識などについて質問紙留置法によって調査した。

結果　対象児童・生徒は、料理メニュー表から１食分の献立として主食を複数選出する傾向がみられた。選出理由としては、『嗜好』を挙げる者が約７割を占め、次いで「いつもこれを食べる」という『日常性』、「おいしそう」という『見た目』の順に挙げられており、栄養面に配慮した発言は認められなかった。保護者の食生活意識に関しては、食生活のうち重要と思う項目として「栄養の確保」を 82.6%が選出していたが、そのうち 44.7%の者が子どもの偏食に対して注意を行っていない傾向がみられた。対象児童・生徒の嗜好と家庭での食物摂取頻度に関連性が認められた。